

内水連

(社) 北海道内水面漁業連合会

発行人 逢坂 健 司

〒061-1435 恵庭市中島町4丁目4-16

TEL・FAX 0123-34-7215

題字・元北海道水産部長 藤原 弘 氏

平成22年度 通常総会開催

社団法人北海道内水面漁業連合会の平成22年度通常総会は、去る5月26日、かでの2・7で開催されました。通常総会の参加人員は、正会員43名(平成22年3月末現在)中、正組合員の出席者6名、委任状提出数27名の合計33名でした。また、来賓として水産林務部漁業指導課遊漁内水面振興グループ、漁業取締・内水面担当佐々木課長、同飯田主幹、同村中主査、さけます内水面水産試験場、等々力副場長、杉若部長が出席しました。逢坂会長の開会挨拶に続き、佐々木課長並びに等々力副場長から挨拶を戴いた後、議長に朱鞠内湖淡水漁協の中南副会長を選出、また議事録署名委員に山本副会長と大高理事を選出して議事に入りました。提出議題は以下のとおりです。

議案第1号 平成21年度 収支決算報告並びに
平成22年度事業予算の一部修正について

議案第2号 会員の動向

議案第3号 平成22年度漁業経営セーフティ
ネット構築事業への参加について

その他

1～3号議案は原案どおり承認、決定されました。主な審議内容は次のとおりです。

議案第1号「平成21年度収支決算報告ならびに平成22年度収支予算案の修正について」では、平成21年度事業報告のうち、情報活動事業の一環である機関紙「内水連」の発行は、第46、47、48号を会員と関係機関へ配布いたしました。

同じく情報活動事業では昨秋、9月16-18日並びに10月15日の2回、道庁前庭で開催された「北のめぐみ愛食フェア」に出店いたしました(本誌第47号参照)。

指導研修事業では、当連合会主催の研修会を本年3月24日、北農健保会館で開催し、逢坂会長の開会挨拶の後、先ず畑山講師は「抗病性を高める餌料添加物について」と題して講演しました。次に東照雄講師は「河川・湖沼の水産資源管理を考える」と題して講演しました。これらの内容は、本誌48号に概要を掲載の通りです。

目 次

平成22年度通常総会開催	1
「フェア2010」に出店参加	2
サケマス内水面水産試験場発足	3
実需・消費の視点から販売戦術を考える(第35回全国養鱒技術協議会開催)	4
平成22年度日本水産学会春季大会開催	6
漁業経営セーフティネット構築事業について(養殖用配合飼料の補てん金について)	9
明石頼幸元会長叙勲	10
編集後記	10

会員巡回指導調査は、日高町(乗田養鱒場)など延6ヶ所で実施しました。

関係機関開催による現地説明会参加としては、北海道立水産孵化場の現地説明会が網走市(9月)、天塩町(2月)並びに蘭越町(6月)におけるワカサギ、シジミ、カワヤツメについて開催され、現地会員が参加しました。

平成22年度収支予算の一部修正については、これまで5月開催の総会で前年度決算報告と併せて承認いただいております当年度事業計画と予算案を、定款に沿って前年度末開催の臨時総会で承認いただき、今回の通常総会でその予算案の一部修正案をご承認いただきました。従来、年度末と年度初めに2回の総会開催は種々負担が大きいとの理由で、5月に纏めて開催してきたのですが、定款通りに2回開催すべきとのご指導に従ったも

のです。

サクラマスの種卵斡旋事業は平成19年度までで廃止となり、平成20年度は中止されましたが、サクラマス種卵斡旋の意義を再考し、平成21年度から当連合会の独自の種卵斡旋事業として改めて斡旋に取り組むことになり、上川漁業生産組合にその生産をお願いしました。さくらます種卵25.5万粒、40.5万円(会員18万粒、27万円、会員外7.5万粒、13.5万円)を斡旋しました。

琵琶湖産アユ種苗の導入は、前年に続き今年も希望者はなく、斡旋は中止となりました。

議案第3号「平成22年度漁業経営セーフティネット構築事業への参加について」は、連合会が基本的に参加し、加入希望者の受付を募ることになりました。これまでのところ8月末の申込期限を過ぎた現在、希望者はゼロの状態です。

「フェア2010」に出店参加 —消流宣伝事業—

本年7月17-18日の「岩見沢赤れんが祭り」並びに7月21-23日のサッポロ・マルシェ(道庁前庭)の2回、それぞれ出店いたしました。今年の売り場はいずれの会場もテント1張の半分で、やや手狭な売り場となりましたが、出品物が少なく、幸いでした。

岩見沢のフェアでは、阿寒湖漁協と吉原養魚場の2会員から出品された阿寒湖産ワカサギの佃煮、ワカサギ昆布巻並びにやまべ甘露煮とやまべ昆布巻を販売しました。初日はサケ・マス内水面水試の等々力副場長の応援と事務局1名の2名体制でしたが、2日目は中南副会長と道水産林務部村中主査の応援を得、3名で販売に当たりました。会場は栄通りを交通止めとし出店者のテントが車道の片側に立ち並ぶ形で、人通りもそこそこのものでした。ただ、この地域の淡水魚の加工品に対する関心は極めて低いようで、僅少の売り上げに止まったのに対し、直ぐ近くの高産魚販売のテントの賑わいが対照的でした。

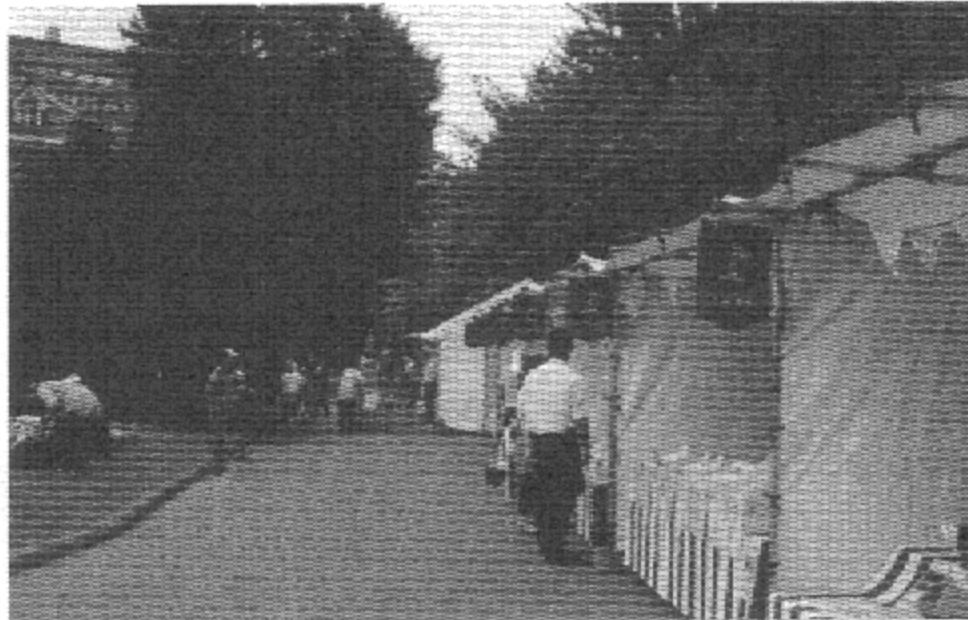


岩見沢-1



岩見沢-2

サッポロ・マルシェは、昨年までの愛食フェアが衣替えしたもので、幟の使用が禁止され、事務局貸与の小旗掲載や販売ケースによる陳列になるなど体裁を統一した運営が特徴的でした。阿寒湖漁協から中井課長、吉原養魚場から吉原理事が参



道庁前庭-1



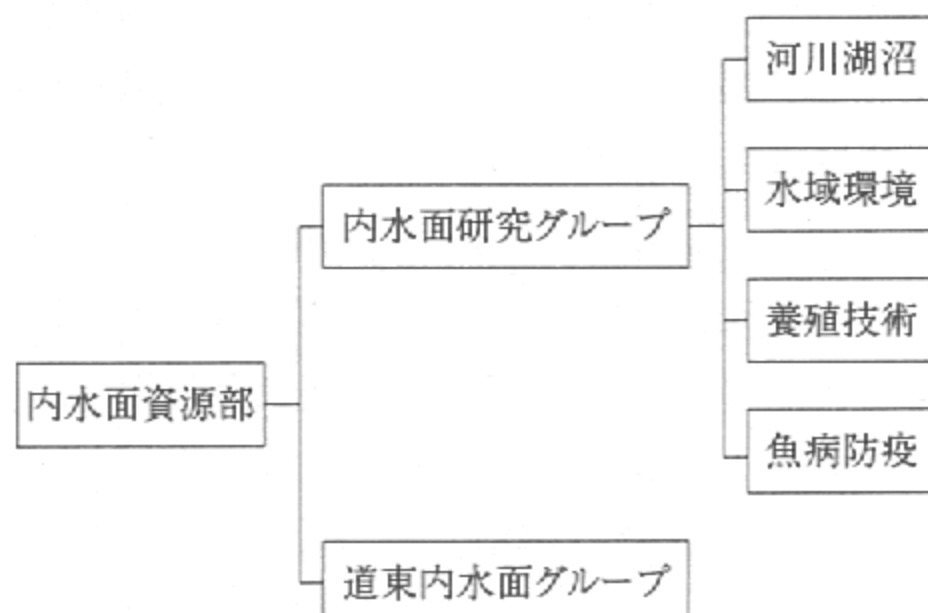
道庁前庭-2

加し、岩見沢と同様の阿寒湖産ワカサギの佃煮、ワカサギ昆布巻並びにやまべ甘露煮とやまべ昆布巻きを販売しました。7月の出店は初めての経験でしたが、昨年までの9、10月の愛食フェアよりも人通りも少なめで、売上も少なかったようです。

サケマス内水面水産試験場発足

北海道立水産ふ化場が平成22年4月から地方独立行政法人北海道立総合研究機構さけます・内水面水産試験場として新たに発足しました。内水面関係の業務、所在地、連絡先等をホームページからご紹介します。

さけます・内水面水産試験場
内水面資源部の体制



河川湖沼の漁業資源や水質環境、効率的養殖方法の技術開発、魚病の防疫などについて担当するセクションです。ワカサギ、シシャモ、ヤツメウ

ナギなどの漁業資源に関する調査・研究、外来魚の生態系に与える影響調査、河川・湖沼などの水質分析とその監視、漁場環境の評価、効率的養殖方法の開発、培養殖対象魚の拡大、稀少遺伝子の保存、魚病診断、予防治療法の開発、培養殖業者への技術指導…などの業務を行っています。

内水面研究グループ

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
さけます・内水面水産試験場
〒061-1433 恵庭市北柏木町3丁目373
TEL: 0123-32-2135 FAX: 0123-34-7233
e-mail: sf-fish@hro.or.jp

道東内水面グループ

〒093-0131 北海道網走市能取港町1丁目1番地
網走市水産科学センター内
TEL: 0152-47-1172 FAX: 0152-47-1173

実需・消費の視点から販売戦術を考える

第35回全国養鱒技術協議会開催 一 宇都宮 一

本年7月8、9日の両日、宇都宮市で第35回全国養鱒技術協議会が開催されました。協議会には、各都道府県の内水面水産試験場、内水面養殖業ならびに関連漁協、餌関連会社担当者等多数が出席しました。

第1日目の開会に当たり、主催県の細江長野県水産試験場長、開催県の糟谷栃木県水産試験場長並びに来賓の水産庁ならびに全国養鱒振興協会からそれぞれ挨拶があり、中心課題の説明の後講演が開始されました。講演は2題あり、最初の山本伸司氏(パルシステム連合会)は、「食の新たな展開と漁業・養殖業の連携について」と題し、「パルシステムは、生協の事業連合で、主に週刊商品カタログによる個人宅配事業を行っている。現在110万人が登録し、そのうち実利用は61万人、インターネット登録は30万人、実利用15万人である。従来の生産者—販売者—消費者の流通とは異なり、生産者と消費者を直接結ぶ産直方式で、商品の安全性実現のため有機栽培による生産と食育運動による価値と顧客の創造ならびにその相互を育成し、農と食をつないで、豊かな地域社会をつくることを目的とする。例えば化学調味料は使用せず、本物の“だし”の提供、梅干しやうどん、味噌の手作り品評会の開催、ふゆみず田んぼの生きもの調査、商品開発への組合員参加などを実践し、資源循環型・環境保全型農業モデルの実現、日本型畜産、全国の地域産地協議会の推進などにより食料自給率向上を推進する。水産では、水産物の持続的な利用の実現に取り組み、日本の水産業の再生をめざすとともに養殖魚を取り扱う。海の産直としては、例えば北海道野付漁協と産直連携、植樹活動の推進、料理教室の開催、森づくりとの交流、沖縄におけるサンゴの森への取り組みなどを進めている。今後は、日本の魚食文化を大切にし、生きること食べることの復権、お金に替えられない富の創造を進める。」と述べました。

次に菅井慎三氏(ホテルエピナール那須総料理長)は、「こんな魚ならば使ってみたい!—観光地のホテル総料理長からの提言—」と題し、「当ホテルでは、基本的に栃木の米、野菜、果物を利用している。フランスのAOC法に因み、独自の標語として表したものが食材AOC宣言であり、使用する食材について一定の基準に合った食材を提供するものである。“食”は、嗜好食から健康食へ、美味しいから旨い、舌から身体の満足へ移行し始めており、“食育”を新しい食のコンセプトとして加えるとともにアレルギー対策にも力を入れる。リピーターを増やすためには期待値を上回る商品の提供を続ける必要がある。一方、現状の養殖マス類は、飼料の高騰、販売価格の低迷、品質への低評価があり、海産魚の方が提案し易いのが事実。おいしさ、価格、旬、特長、取り扱い易さの5つが重要であり、栃木の鶏卵、豚、牛、野菜では満たしている。野菜はその日に使い切る量だけ購入し冷蔵庫は使わない。常に生産者と接触し、生育状態を観察して少量高品質を維持している。養殖魚は、生産者の熱意により特長作り、価格の安定、天然資源の保全が可能であり、ヤシオマスの各種料理に取り組んでいる。」と述べました。

次に中心課題関連の事例紹介として、降幡充氏(長野県水試)は、「信州サーモン協議会の設立について」と題し、「長野県水試ではニジマスとブラウントラウトの交配種3倍体を信州サーモンと命名し、信州特産高級魚として知名度アップのための取り組みを進めてきた結果、平成21年度現在、生産量は200t、取り扱い店舗数は300件を超えるまでとなった。一方、肉色、味、匂い等の品質のばらつきや料理人の肉色に対する要望の違い、市場・流通関係者からの働きかけによるブランド化、他のサケ・マス類との差別化等の動きを背景に信州サーモン協議会が本年5月に設立された。本年度の事業として、地域団体商標の申請、ロゴマー

クシールの作成、料理人向けの試食会開催、養殖技術や品質管理技術向上のための講習会開催を予定する他、養殖管理指針と種苗等取扱要領の策定、信州デステイネーションキャンペーンを予定している。」と述べました。

平成21年度研究部会・課題研究報告では、魚病対策部会の「疾病実態調査報告」を、富士養鱒場が全国の会員23都県その他、北海道についての調査結果として報告(表1参照)。

最近問題となっている疾病としては、山梨県からIHNの長期化と、薬剤の効かない冷水病の報告があった。

表1 IHN、せつそう病、細菌性鰓病の診断件数(混合感染含む)

	実診断件数	冷水病	IHN	細菌性鰓病
ニジマス	203	78	93	19
ヤマメ	76	10	12	20
アマゴ	40	6	6	2
イワナ	92	11	4	18
その他	117	20	4	15
計	528	125	119	74

次に全国サケ科魚類種卵・種苗生産状況調査結果について大分県農林水産研究指導センターは、全国23都県と北海道の養殖経営体数、魚種別経営体数、種卵生産経営体数、年間普通種卵生産量、年間バイテク種卵生産量、年間普通種卵生産量、年間バイテク種苗生産量、河川、湖沼への放流用種苗出荷量、海面養殖用種苗の生産量、埋没放流卵数、普通種卵・種苗価格、バイテク種卵・種苗価格の普通種卵・種苗価格との対比について報告したが、このうち普通種卵・種苗価格、バイテク種卵・種苗価格の普通種卵・種苗価格との対比については表2、表3、表4のとおりである。

表2 普通種卵価格 (単位:円/万粒)

魚種名	項目	2009年次	2008年次
アマゴ		11,750 ~ 22,000	16,000 ~ 30,000
イワナ		15,000 ~ 35,000	14,500 ~ 30,000
オシロコマ		20,000	
ギンザケ		44,000 ~ 99,000	42,000 ~ 80,000
サクラマス		15,000 ~ 30,000	20,000 ~ 20,000
ヤマメ		15,000 ~ 22,000	15,000 ~ 22,000
ニジマス		8,000 ~ 17,500	8,000 ~ 20,000
ニジマス(異)		9,000 ~ 42,000	9,000 ~ 13,200
ヒメマス		60,000 ~ 90,000	80,000 ~ 90,000
ブラウントラウト		16,800 ~ 20,000	16,800 ~ 20,000

表3 普通種苗価格 (単位:円/万粒)

項目 魚種名	小型種苗(単位:円/尾)			
	2g		5g	
	2009年次	2008年次	2009年次	2008年次
アマゴ	7.20~15.00	7.20~14.80	12.15~18.50	12.15~20.00
イワナ	8.00~17.50	8.90~20.00	11.70~25.00	10.00~25.00
ギンザケ	17.00		10.00~17.00	14.00~15.50
サクラマス	10.50~13.00	10.50~13.00	15.00	12.00~15.00
ヤマメ	8.60~18.00	9.10~30.00	9.00~20.00	6.00~16.80
ニジマス	3.75~13.70	4.44~10.00	5.70~11.00	6.80~12.00
ヒメマス	6.00	9.00~13.00	16.90~30.00	16.90~30.00
ブラウントラウト	18.00	13.80		18.50

項目 魚種名	小型種苗(単位:円/尾)		大型種苗(単位:円/kg)	
	10g		50g以上	
	2009年次	2008年次	2009年次	2008年次
アマゴ	16.5~24.0	16.5~24.0	1,170~1,667	1,170~1,500
イトウ				1,000
イワナ	11.0~24.0	13.0~40.0	1,130~2,000	503~3,850
ギンザケ			763~768	763~2,000
ヤマメ	10.9~20.0	10.0~42.0	1,350~2,000	800~3,000
サクラマス		20.0		
ニジマス	10.0~13.5	10.0~30.3	524~1,230	503~1,500
ヒメマス		21.1	1,506	
ブラウントラウト			1,300	1,300~2,400

表4 バイテク種卵・種苗価格の普通種卵・種苗価格との対比

項目 魚種名	種類	発眼卵		小型種苗(2g)		大型種苗(≥50g)	
		2009年次	2008年次	2009年次	2008年次	2009年次	2008年次
		アマゴ	全雌	1.00~1.20	1.00~1.20		
	全雌3倍体	1.00~1.50	1.00~1.50		1.00		
ニジマス	全雌	1.00~1.20	1.00~1.20	1.00~1.20	1.00~1.20	1.00	1.00
	全雌3倍体	1.00~3.50	1.00~3.50	1.00~2.00	1.00~2.00	1.00~1.03	1.03
ヤマメ	全雌		1.00~1.10		1.00		
	全雌3倍体	1.20~1.71	1.10~2.01	1.50	1.50		
ニジアマ	全雌3倍体	1.00	1.00		1.00	2.07	2.07
ニジイワ	全雌3倍体		1.00		1.00	2.07	2.07
ニジニジ	全雌3倍体			2.08	3.09		

次に養殖技術部会の活動報告として山梨県水産技術センターは、「(1)カテキンによる卵膜軟化症対策(省略)、(2)電照によるヒメマスの卵質改善について、電照飼育でヒメマスの採卵時期を遅くすることにより、卵質の改善について検討した結果、98日間の電照で3週間程度採卵器が遅延化され、採卵時期は分散化した。発眼率とふ化率は有意に高かった。(3)ニジマス着臭の一原因について、排水沈殿池で無給餌で天然餌料を摂餌させた群れは2ヶ月後に着臭し官能評価が落ちた。給餌群も若干着臭したがほとんど問題はなかった。着臭魚は湧水で2週間程度飼育すると除臭できた。」と述べた。

最後の研究報告では、宮城県が「宮城県におけるイワナ在来個体群調査の結果と今後の展開」と題し、「環境変化に柔軟に対応するためには多様な在来個体群が存在することが必要であるとされる一方、放流魚による遺伝子攪乱や過剰な漁獲圧により在来個体群は減少しつつある。今回から個体群の生息状況を調査した結果、宮城県内の5水系に15の在来個体群の存在が推定された。このうち

江合川の在来個体群を継代飼育し、種卵を同川に埋設卵放流したが、ふ化率は91%と良好であった。現在、在来種イワナ種苗の生産試験を実施中で、県内の河川に放流する全イワナ種苗を在来種とすることを目指している。」と述べました。

次に栃木県は、「免疫賦活剤を利用したニジマスの魚病被害低減への試み」と題し、「現在養殖業の抱えているニジマス生産コスト増大の問題点のうち、魚病被害の増大による歩留まり低下について、体内環境を改善するための免疫賦活剤としてビタ

ミンC、アスタキサンチン、 β -グルカンの3種のサプリメントをそれぞれ単体と混合で3ないし7日間投与し検討した結果、混合の7日間の投与により総合的な機能の向上が認められ、細菌性疾病に対する抗病性の向上がみられた。これを10gサイズの10万尾に約1万円の混合サプリメントを7日間投与した場合について試算すると、15%の歩留まりがアップした場合、19万円余の節約が期待される。今後はウイルス性の疾病への効果を検討したい。」と述べました。

平成22年度 日本水産学会春季大会開催 — 藤沢市 —

3月26日～30日、藤沢市の日本大学生物資源科学部で平成22年度日本水産学会春季大会が開催されました。大会では分野別11会場における口頭発表とシンポジウム並びにポスター発表が平行して開催されました。以下比較的身近な話題に関する研究発表をご紹介します。

阿部智貴氏他(北大院水)は、「チョウザメの生体外卵成熟、排卵及び発生誘導」と題し、「チョウザメ類の卵巣をホルモン添加により培養し、生体外卵成熟および排卵誘導に続き、排卵された卵の受精および孵化にも成功した。本法により数カ月にわたり同一個体から複数回に分けて仔魚を得ることが可能になるかもしれない。」と述べました。

渡辺智治氏他(道孵化場)は、「北海道網走湖産ヤマトシジミの産卵期における高水温、塩分、貧酸素耐性」と題し、「網走湖は低塩分の上層と貧酸素、高塩分の下層の2層構造で、境界は上下に変動する。ヤマトシジミは低塩分の沿岸に生息するが、年により上層水の淡水化や高水温期の水底での貧酸素化が見られる。今回、夏季産卵期のシジミ成貝の24℃の高水温下での塩分濃度及び貧酸素に対する耐性を実験的に調べた結果、夏季の網走湖で水温が24℃に上昇して貧酸素化した場合、塩分濃度2psuの上層、同20psuの下層共に6日程度で死亡する可能性の高いことが示された。」と述べました。

大美博昭氏他(大阪環農水総研)は、「淀川感潮域におけるヤマトシジミ幼生の分布」と題し、「淀川から淀川大堰の間でヤマトシジミ幼生の分布を調査した結果、7～8月の間、全地点にD型幼生が分布していたが、流心部の塩水くさびの最上流付近の塩分躍層の近くで周囲よりも高密度で分布する傾向がみられた。」と述べました。

笠井亮秀他氏(京大院農)他は、「天然水域におけるヤマトシジミの成長要因の解明」と題し、「天然水域におけるヤマトシジミの成長要因解明のため十三湖において実験するとともに環境要因を測定した結果、ヤマトシジミの成長は、餌料よりも水温に大きく依存していると考えられる。」と述べました。

東信行氏他(弘前大農生)他は、「十三湖におけるヤマトシジミの減耗要因について」と題し、「減耗要因としての捕食圧を調べるため湖内5個所に設けた実験区で調査した結果、高い減耗率は90%を超えたが、海に近く、塩分の影響の高い地点では減耗率が低く、河川流量が小さい場合に顕著な差となったことから塩分を好まない淡水生物による捕食圧が影響していることが示され、特にコイ科魚類の影響が大きいことが示唆された。一方、海産・汽水性魚類の影響は少ないと考えられた。」と述べました。

神村裕之氏(近大農)他は、「琵琶湖におけるビワマスの水平・鉛直移動」と題し、「琵琶湖北湖においてビワマス3尾(体長39-46cm、体重900-1,340g)の超音波発信機による移動を調査した結果、水平移動は北湖北部から中央部に、鉛直移動は表層から深層におよび、琵琶湖を幅広く利用していることが示唆された。」と述べました。

川島祐一氏他(東北大院農)他は、「マイクロサテライトDNAから検討した十和田湖のワカサギ個体群の起源」と題し、「小川原湖産ワカサギの遡河回遊型と滞留型の遺伝的差異を調べた結果、遡河回遊型と滞留型間には有意な遺伝的分化がみられたが微弱なもので、生活史型の区分とは一致しなかった。このことは2つの分集団が存在し、各分集団内で生活史分岐が生じていることを意味している。」と述べました。

杉浦省三氏他(滋賀県大)他は、「DNAによる外来魚の食害生物の同定」と題し、「外来魚による食害生物の同定およびその程度について調査した結果、外来魚の消化管内容物や糞の中のDNAを分析することで、食害された生物種の同定およびその程度を明らかにすることが可能であることが示された。」と述べました。

牧口裕也氏(北大フィールド科学セ)他は、「標津川の蛇行復元がサクラマス幼魚の河川内行動に及ぼす影響」と題し、「サクラマス幼魚20尾にナノタグ発信機を装着し、河川内行動のを解析した結果、蛇行部は生息場所として好適な場所が直線部よりも多かったと考えられた。」と述べました。

山本圭一氏(北大院環)他は、「加速度ロガーを用いたニジマス、アメマス二種の遊泳行動の比較」と題し、「ニジマスは、近年在来魚のアメマスから本種へと河川における優占種が置き換わっていると報告されている。2種間における競争のメカニズムを解明するため両種の運動能力・日周性の違いについて検証した結果、アメマスは、ほとんどの時間を水底に静止していた一方、ニジマスは、常に遊泳していた。さらに両種は急加速に際し、アメマスは一度の強い振動で推進力を得ているのに対し、ニジマスは複数回の強い振動によって推進力を得ていた。」と述べました。

田子泰彦氏他(富山水研)他は、「神三ダム直下の淵で越夏したサクラマス親魚が選択した水温と水

深」と題し、「サクラマス親魚の越夏場所およびそこでの生息水温を調べた結果、産卵期まで神三ダム下流の淵に滞留していた2尾の親魚は、生息水温16-12℃、日中には0.5m以浅の表層付近を、夜間には日中より少し深い層を選択する傾向が認められた。最大潜行水深は6m(淵の最大水深14m)であった。また、越夏に際し、親魚は淵の底に静穏にしているのではなく、水面近くの表層付近での遊泳を好み、時に淵の深部への潜行を繰り返すと考えられた。」と述べました。

中村智幸氏(中央水研内水面研究部)は、「溪流に生息するイワナとヤマメの初期餌料の比較」と題し、「イワナとヤマメの稚魚の初期餌料を明らかにするため3-5月の産卵床から浮上後にかけての稚魚(体長40mm未満)を採捕し胃内容物を分析した結果、胃内容物に占める比率が高かったのは、イワナではソコミジンコ目とユスリカ目であり、両者の比率には有意差は認められなかったが、ヤマメではユスリカ科、ソコミジンコ目、カゲロウ目の占める比率が高く、ユスリカ科の比率が最も高かった。イワナの科目間の選択指数に有意差がなかったが、ヤマメではカゲロウ目の指数が比較的高かった。」と述べました。

安藤大成氏他(東北大院農・道ふ化場)他は、「非放流河川に遡上するシロザケ親魚の起源の推定」と題し、「千歳川(放流河川)と漁川(非放流河川へ遡上するサケのDNA解析及び計数形質の比較を行い、非放流河川に遡上する個体の特性評価した結果、漁川の集団は、千歳川の集団と遺伝的には均質ながら腹椎骨数と脊椎骨数は漁川の集団は千歳川の集団に比べ有意に高い値を示し、単なる迷入集団ではなく、独自に再生産している集団である可能性が示された。」と述べました。

安藤大成氏(東北大院農・道ふ化場)他は、「サクラマスの計数形質を用いた放流魚の影響評価」と題し、「北海道日本海側におけるサクラマス野生集団と放流河川集団の計数形質を調査した結果、放流河川集団・飼育魚の腹椎骨数、脊椎骨数は野生魚に比べて低い値を示し、これらを比較することで放流河川における放流魚の寄与効果を推定することが可能であることが示された。」と述べました。

高橋芳明氏(和歌山農水総技セ)他は、「遡上アユに含まれる他河川由来個体の成長について」と題

し、「非放流河川である日高川に遡上した標識放流アユの成長履歴を同時期に孵化した遡上個体と比較した結果、成長速度の低下が特徴的であり、11-12月の南北海流が卓越したことにより南に位置する河川由来のアユが日高川に遡上した可能性が考えられた。」と述べました。

武島弘彦氏(東大海洋研)他は、「人工種苗でも放流河川で再生産に貢献する」と題し、「人工産アユ種苗の再生産への寄与を解明するため放流以前の個体と人工種苗放流後の個体の遺伝的特性を検討した結果、人工種苗を親に持つ子の世代が遡上する事実が確認され、人工産アユ種苗のなかには、放流先の自然条件下で再生産に成功するものが含まれることが証明された。」と述べました。

山根広大氏他(北大院環境)他は、「炭素・窒素安定同位体を用いた洞爺湖の食物網解析」と題し、「洞爺湖の魚類の胃内容物解析および各種生物の安定同位体比解析を行った結果、15cm以上の大型ヒメマスは小魚と動物プランクトンを主に捕食し、小型ヒメマスおよびワカサギは夏季に動物プランクトン、冬季には小魚とヨコエビを中心とした競争性を見せ、サクラマスは小魚を通年捕食していた。ヨシノボリとエゾウグイは沿岸性の無脊椎動物を主な餌としていた。有珠山噴火後には沖帯魚であるヒメマスとワカサギにおいて動物プランクトンの捕食率が増加した。」と述べました。

藤本泰文氏(伊豆沼財団)他は、「伊豆沼・内沼における外来魚防除活動によりオオクチバスの減少と漁業資源の回復」と題し、「定置網によるオオクチバス当歳魚と一歳魚の駆除では繁殖の抑制には至らなかったが、人工産卵床による卵と三角網によるふ化仔魚の駆除活動の結果、オオクチバスは減少傾向にあることが示唆され、オオクチバス侵入以前の1%に減少していたコイ科やハゼ科魚類の漁業対象種は、侵入前の59%まで回復した。」と述べました。

沼田慎司他氏(道栽培公社)は、「バイオテレメリーシステムを用いたハイダム周辺におけるサクラマス親魚の行動追跡について」と題し、「北海道沙流川の二風谷ダム付近で採捕したサクラマス親魚に発信機を装着して行動を追跡した結果、湛水

池内を約4.4km/日、湛水池通過後は2.1km/日の速度で遡上を続けたと推定された。一方、ダム地点から降下し、約15km下流の支流へ再遡上した個体も確認された。」と述べました。

安房田智司氏他(中央水研)は、「濁りに対するアユのストレス応答」と題し、「琵琶湖産、海産系統、継代飼育系統の3系統のアユの濁りに対するストレス応答を実験的に検討した結果、琵琶湖並びに海産系統アユは濁りに対して強いストレス反応を示したのに対し、継代飼育系統アユは弱い反応に止まった。」と述べました。

野本和宏氏は、「北海道東部における絶滅危惧サケ科魚種イトウの減少要因の解明」と題し、「イトウの産卵床数と環境変量との関係を調べた結果、過去50年間に増加した草地化の影響により調査した32支流では52.8%の産卵床の減少が起きたと推定された。」と述べました。

片山亜優氏他(東北大院農)他は、「宮城県名取川におけるヤマトシジミの生息環境の違いと食物供給について」と題し、「河口から1.5km、3.5km、4.5kmの各地点のヤマトシジミの脂肪酸比率は、DHAの割合が上流に向かうに従い高くなる傾向が見られた。また、胃内容物は、デトライタスと微細藻類が多く認められた。珪藻の種類は、下流では非常に少なく、上流側では底生珪藻が非常に大きな割合をしめ、種数も多かった。」と述べました。

楠田聡氏(道孵化場)他は、「ドジョウの生息に配慮した排水路改修の効果」と題し、「排水路改修工法を開発する一環として、排水路改修前後のドジョウ等魚類の生息状況を調べた結果、改修にともないドジョウ等魚類の主要な生息域が変化すること、柵渠、有孔型トラフ、有孔型柵は、魚類の生息場所として有効であり、排水路の底面は土であることが重要であると考えられた。」と述べました。

水野伸也氏他(道孵化場)他は、「ヤマトシジミの生理状態に及ぼす貧栄養環境の影響」と題し、「シジミの質の評価技術を開発するため本種の無給餌による貧栄養環境の影響を実験的に調べた結果、小型貝では飼育1月目で貧栄養の影響が認められたが、大型貝では認められなかった。」と述べました。

漁業経営セーフティネット構築事業について

これまで関連資料・説明会参加等によりご紹介して参りました水産庁による表記事業は、燃油・養殖配合飼料の高騰による内水面漁業・養殖業経営への深刻な影響を背景としております。当連合会としては当該事業への基本的な参画を決め、会員の皆様を中心に加入を呼び掛けて参りましたが、これまでのところ希望者はございません。今一度当該事業の補てん金の概要に関する資料を掲載し、参考に供します。

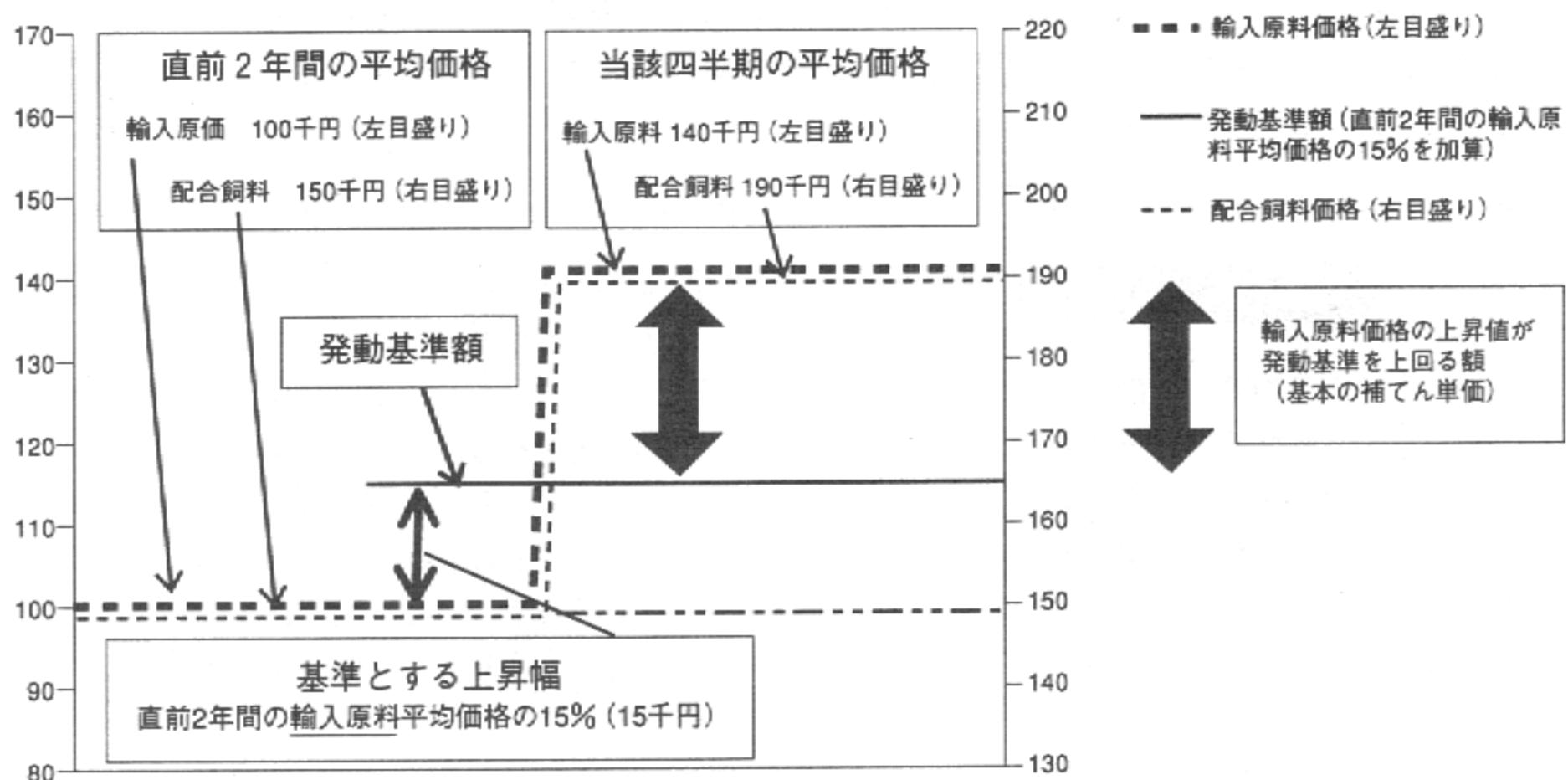
養殖用配合飼料の補てん金について

- 1 補てん単価は、当該四半期の平均輸入原料価格が直前2年間の平均価格に115を乗じた価格を超えた分を基本とします。
- 2 ただし、製品としての配合飼料の価格が、輸入原料価格と同等以上に上昇していない場合には、配合飼料価格の上昇額をもって計算を行います。
- 3 すなわち、配合飼料価格の上昇額(当該四半期の平均価格と直前2年間の平均価格との差)が、輸入原料価格の上昇額(同)を下回る場合は、1の補てん単価からその下回る額を控除した額が補てん単価となります。

〈例1〉

- ア 直前2年間の平均輸入原料価格 100千円
- イ 当該四半期の平均輸入原料価格 140千円
- ウ 直前2年間の平均配合飼料価格 150千円
- エ 当該四半期の平均配合飼料価格 190千円
- オ 輸入原料価格の上昇額(イーア) = 140千円 - 100千円 = 40千円
- カ 配合飼料価格の上昇額(エーウ) = 190千円 - 150千円 = 40千円
- キ 基本の補てん単価(イーア × 1.15) = 140千円 - 100千円 × 1.15 = 25千円
- ク 配合飼料価格の上昇額が、輸入原料価格の上昇額を下回る額(オーカ) = 40千円 - 40千円 = 0千円

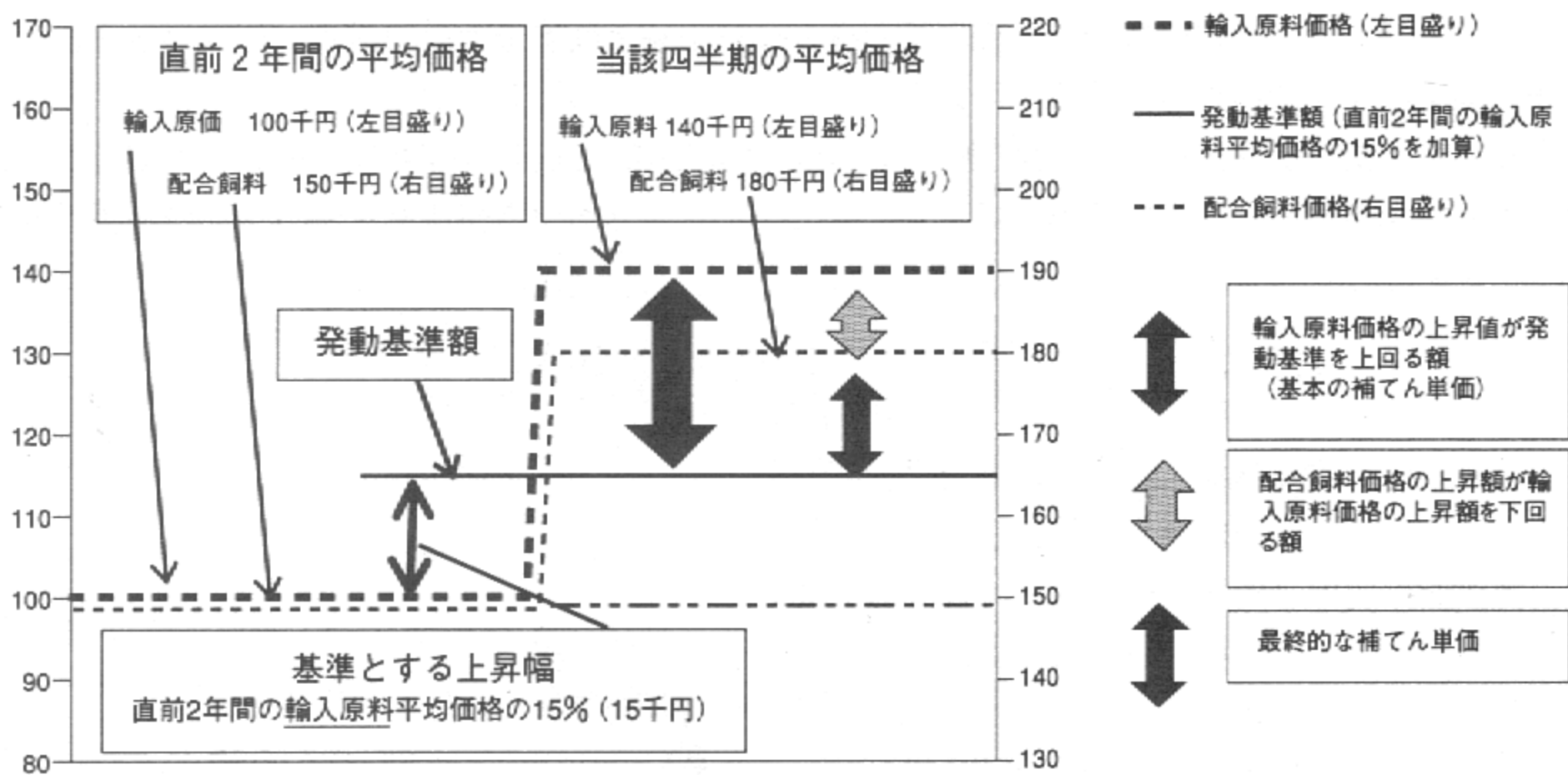
この場合は、配合飼料価格の上昇額(カ)と輸入原料価格の上昇額(オ)が同じ額である(下回っていない)ため、補てん単価は基本どおり25千円(キ)となる。



〈例 2〉

- ア 直前 2 年間の平均輸入原料価格 100千円
- イ 当該四半期の平均輸入原料価格 140千円
- ウ 直前 2 年間の平均配合飼料価格 150千円
- エ 当該四半期の平均配合飼料価格 180千円
- オ 輸入原料価格の上昇額(イーア) = 140千円 - 100千円 = 40千円
- カ 配合飼料価格の上昇額(エーウ) = 180千円 - 150千円 = 30千円
- キ 基本の補てん単価(イーア × 1.15) = 140千円 - 100千円 × 1.15 = 25千円
- ク 配合飼料価格の上昇額が、輸入原料価格の上昇額を下回る額(オーカ) = 40千円 - 30千円 = 10千円
- ケ 最終的な補てん単価(キーク) = 25千円 - 10千円 = 15千円

この場合は、カがオを下回ることから、基本の補てん単価(キ)から、その下回る額(ク)を控除した額 15千円(ケ)が補てん単価となる。



明石頼幸元会長叙勲

元当連合会会長の明石頼幸氏が春の叙勲受章者として旭日双光章を受章されました。旭日章は、「社会の様々な分野における功績の内容に着目し、顕著な功績を挙げた者を表彰する場合に授与するもの…」の旨であり、ここに皆様にお知らせいたします。

編集後記

今年の6-7月の約一月間は南アで開催されましたワールドカップサッカーで日本チームが決勝トーナメント進出を果たした話題で盛り上がりました。残念ながら不景気の嵐を吹き飛ばすまでにはなりませんでしたが。7月当初は日照不足の影響が心配されましたが、その後の猛暑であっさりと取り返したようです。本文にも述べました通り、

7月に当連合会としては初めて岩見沢の「赤レンガ祭り」の食品フェアに出店しましたが、売上は極めて低調に終わり、淡水魚加工品の販売の難しさを再認識させられた次第です。

予てより当会報の配布については財源縮小により見直しを迫られてきましたが、本号からホームページに掲載することで従来無償配布して参りました会員以外の方々への閲覧をお願いすることといたしました。